

ヨーロッパ人から見た17世紀の日本

Michel, Wolfgang

Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University : Professor : History of Euro-Japanese Cultural Exchange

<https://hdl.handle.net/2324/8093>

出版情報：海外交流と小城の洋学：小城鍋島藩にみる，pp.41-46，2007-10-13．佐賀大学地域学歴史文化研究センター

バージョン：

権利関係：

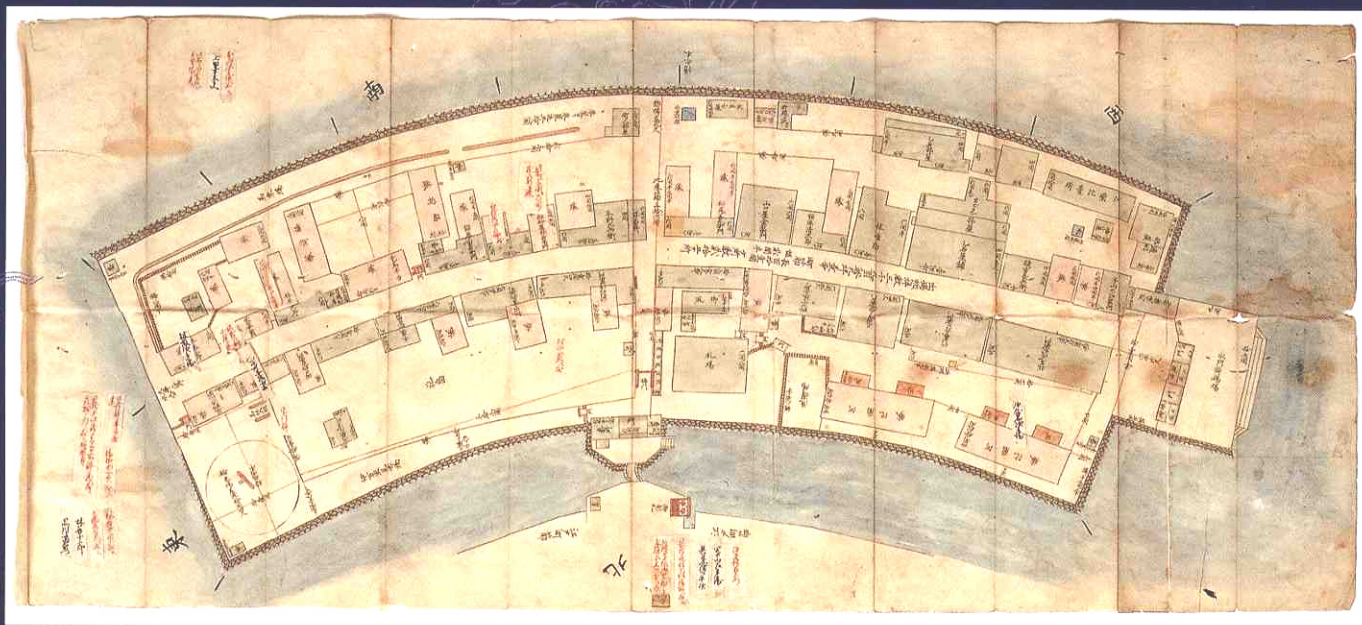


佐賀大学・小城市交流事業特別展

佐賀大学地域学歴史文化研究センター開館1周年記念展

海外交流と小城の洋学

——小城鍋島文庫にみる——



2007年10月



佐賀大学地域学歴史文化研究センター

論考

ヨーロッパ人から見た一七世紀の日本

九州大学大学院教授 ミヒエル・ヴォルフガング

南蛮人の遺産

一五四九年鹿児島に上陸した宣教師フランシスコ・ザビエルや、彼後に日本にきたイエズス会士の書簡では、中国とは対照的に西洋人を寛大に受け入れた日本のことが、極端なほど礼賛されている。日本人は質素に暮らし、礼儀正しく勇敢で素晴らしい文化を持った、「新発見地の中の最良なる者」であった。^①「ジパング」（日本国）はマルコポーロが描いたほどの黄金の国ではなかったにしても、石見、佐渡、生野などで採れた銀や金は、南蛮貿易により大量に流出して、当時広がりつつあった貨幣経済に大きく貢献したのである。これら初期の日本像に加え、さらにはキリスト教文学が好んだ「見知らぬ地」（locus amoenus）の不思議な景観や、地の果ての島（ultima Thule）に辿り着いた西洋人の驚嘆も加わって、当初の布教活動の素晴らしい成果があがるにつれ、西洋の読者たちはこの東方の理想郷へますます強い憧れを抱くようになったのである。^②

しかし、宣教師の日本熱は長くは続かなかった。国内の戦乱と大小様々の失策のため一五七〇年代頃から布教事業を取り巻く環境は次第に厳しさを増した。イエズス会の本部が派遣した巡察師ヴァリニャーノは、総合的調査のためベテラン宣教師フロイス神父の手により日本にお

ける教会の歴史ならびに日本文化の概要を執筆させることになる。さまざまな不安や疑問を抱えながらフロイスは、一五八五年に書き上げた日本文化に関する論文において日本と西洋の相違点や対立点を明らかにし、日本をヨーロッパの「対蹠地」と位置づけている。以前のよう日本礼賛は消え、日本人の勇氣と誇りは残忍さと傲慢に、道徳は悪徳に取って代われ、日本との地理的距離があることが文化的差異の象徴になってしまったのである。^③その後ヨーロッパに届く書簡や年報には、キシタン弾圧に関する記述が増え、次第に読者の日本人像は二分化されることになる。善良な信者を虐殺する日本人が厳しく批判される反面、信仰のために死を選ぶ日本人のことが称賛的になった。後者の一部は宗教劇の主人公として南部ドイツやオーストリアの劇場で一八世紀に至るまでヨーロッパ人にとってキリスト教徒の「手本」となった。^④

対外関係の再編

いわゆる「鎖国」への動きは、長期的戦略に由来するものというより、むしろ数十年にわたる様々な出来事や刺激に対する反応の結果であり、一六三九年に南蛮人に布告された「来航禁止令」は、豊臣秀吉の伴天連追放令によって始まった数々のキシタン弾圧の「最後の禁令」といえよう。「鎖国」という言葉がその後約一六〇年を経てようやく使われるようになったのは偶然ではない。一七世紀の政策責任者の念頭にあったものは、何よりも新しい支配体制の確立と、それを支える社会の安定であった。海外貿易の管理によって、とりわけ九州諸大名の収入削減や金銀流出ならびに輸入品市場の把握が可能になったが、宣教師が布教に努めていた一神教秘められている力も強く認識されていた。当初ポルトガル人は一六三九年の来航禁止令の本質を正しくは理解していな

かった。翌年来日したマカオ船のカピタン (capitão) は、商品を積んでいないので、使節として交渉を行えると思ひ込んでいた。その四年後、ポルトガル王が派遣した使節も樂觀的だったが、平戸商館長カロンもオランダ東インド会社のバタフィア総督も、問題となる宗教的側面をよく理解し、日本での言動には注意を払っていた。^⑤

南蛮人の追放により、長崎に繁栄をもたらした南蛮船は姿を消し、地元の経済は危機的状況に陥った。もともとポルトガル人を収容するために莫大な費用をつぎ込んで埋め立てられた築島 (出島) の事業も、投資家の破産を招くおそれがあった。市民の間に高まる不安を解消するため、幕府は、平戸オランダ商館長に圧力をかけ、ついには直轄地、長崎への移転の了解へと追い込むことになるのである。

当時の対外的権限は幕府に集中していたが、松前藩、対馬藩、薩摩藩は近隣の国や地域との交渉を保ち続け、^⑥ 通常の実務を任されていたので、物や情報の往来はさほど衰えることがなかった。また、後を絶たない密貿易や遭難船の漂流が近世日本の国際交流に貢献したことも見過ごしてはならない。

一七世紀の国境にあいまいな領域があったものの、幕府の「華夷」意識はすでに観察できる。「かびたんもつくばはせけり君が春」という芭蕉の俳句が表しているように、紅毛人のカピタンは、一六三三年以降毎年江戸へ参府し、通商許可に対する謝意を表さなければならなかった。カピタンは朝鮮王朝の通信使と同じく江戸城の大広間での拝謁を許され、献上品に対し時服などの返礼も受け取ったが、オランダ国の代表者

と見なされるまでには至らなかった。^⑦ 一六四七年長崎に辿り着いたポルトガル王の使節は追ひ返されたが、その後、幕府が「オランダ王朝」の同様な特使の派遣を要請したことは、商館長に対する位置づけがどうであったかをよく表している。^⑧

紅毛人の体験

南蛮勢力との敵対関係をはっきりさせ、布教活動は行わずに低姿勢でいたオランダ人は国外追放を免れたが、出島への移転後彼らの行動範囲は著しく狭められた。出島は借地料を払わなければならない私有地でありながら、そこからの外出は禁じられ、出入りする職人、通詞、検使などは、長崎奉行の許可が必要であった。冷静で忍耐力の強い医師ケンペルでさえ、それに対して「牢屋」という評価を下している。一七世紀に七つの海の覇者だったオランダ人は、長崎湾の入り口付近で、十字架や聖書など宗教色の強いものをすべて隠し、湾に入ってから武器や火薬などを出航まで預けなければならなかった。糸割符制度、相對貿易、仕法商法、定高仕法、代物替商法と、世紀末まで続く貿易形態の改革により東インド会社の収益は最終的にかなり減少させられたが、オランダは幕末まで日本との関係を重んじ、手を引くことはなかったのである。

一六三六年、平戸商館長フランソワ・カロンは、バタフィアからの一連の問いに答える形で日本の地理、宗教、法律、住居、子供の養育等々を採り上げ比較的好意的な日本像をまとめている。^⑨ 『強大な王国日本』と題して刊行されたこの著作は、当時のイエズス会による殉教報告とならび、一七世紀前半の最も重要な情報源であったが、後に東インド会社から離れたカロンに対するオランダ人の反発は強かった。また、一六四

一年から出島での商業活動や日常生活において様々な制約を受けるようになった商館員の日本観が厳しいものになったことも、この反発に荷担したのである。

出島への移転後、国内の動きを把握することは容易ではなかった^⑩。この点で商館長の他二、三人のヨーロッパ人が通詞、料理人、検使など数多くの日本人を伴って行った江戸参府が見直されるようになった。歴代の商館長は、長崎街道、瀬戸内海及び東海道の様子を業務日誌に綿密に記録していた。江戸のオランダ宿（長崎屋）での訪問者の接待、幕府関係者との交渉及び江戸城での謁見などは、日本の上層部について知る手段でもあった。しかし、日本人が重要視した拝謁は多くの商館長には不評だった。大広間の御簾の中に隠れて姿を見せない將軍の前で黙って平伏することは、王侯と言葉を交わすことができた西洋の謁見とはあまりにも異なっていたからである。五代將軍綱吉は、この正式の拝謁が終わってから江戸城の白書院でもう一つの会見の場を設けたが、西洋の歌や演技などをしつつこく求められ、それは商館長たちにとって耐え難いものであった。ケンペルの『日本誌』によりヨーロッパ中に知られるようになったこの「謁見」の「第二幕」は綱吉の死によって終わるものの、それはまた、ヨーロッパ人の想像力と感情を刺激する日本像の一端として一九世紀まで存続することになる^⑪。

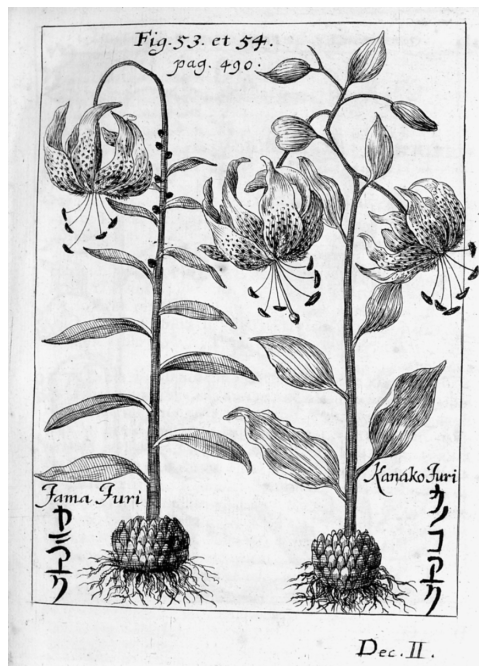
学術交流の始まり

一六三九年七月、平戸商館長カロンは老中酒井忠勝及び大目付井上政重等から、ポルトガル人追放後には、日本が必要とする生糸、絹、医薬品の供給を保証してもらえるかどうか、再三にわたって尋ねられた。幕

府が国の対外依存度の高さを気にしていたことは間違いない。西洋の科学技術に対する日本側の姿勢もこの時期から変わり始める。島原の乱で直接射撃用のカノン砲が攻城の兵器として役立たないことが明らかになってから、間接射撃用の白砲が注目されるようになった。専門家の派遣を要請された東インド会社はしばらく難色を示していたが、一六四九年測量術と白砲に精通した軍人を特使フリジウスの使節団に加え、白砲数門とともに日本に送った。幕府の依頼により、この「火矢打」ユリアンと、同伴の外科医カスパルら計四人はフリジウス一行が長崎へ帰ってから、さらに数ヶ月間江戸に残っていた。ユリアンが披露した試射は高評だった。カスパルの治療は上層部の間に西洋外科術に対する強い関心呼び起こし、紅毛流外科の誕生につながる^⑫。一六五一年から東インド会社は医薬品、医書、道具などの注文を継続的に受けるようになり、また歴代の商館医は長崎と江戸で外科術の教授を行うようになった。また、治療と教授の場に立ち会う通詞の中からも、猪俣伝兵衛、本木庄太夫、植林鎮山など西洋医学を志す者たちが現れるようになった^⑬。

一六六七年、高価な西洋医薬品の輸入を減らすために、両長崎奉行は將軍の名において一連の植物の種と蒸留器の提供及び薬草の専門家の派遣を求めた。来日した薬剤師は、幕府の費用で出島に建てられた「油取家」で油薬の製造法を教えながら、長崎周辺での有用植物の合同調査を行っている。輸入植物の栽培は思い通りにいかなかったが、蒸溜技術の移転は成功し、国内の薬草は中国の本草書だけでは十分に把握できないという認識が広まり始めることになる^⑭。

当時の日蘭貿易において主導権を握っていたのは、東インド会社では



ドイツ学士院の機関誌（1690年）に見られる日本の百合（Andreas Cleyer: De Floribus Japanensibus Kanako Juri & Jama Juri. Miscellanea Curiosa, Decuria 2, Annus 7, Observatio 191。筆者蔵）

なかった。それは学術交流についても言える。医薬品、道具、書籍などに加え、専門家の説明と教授を求め、オランダ人が提供したもののや情報を取捨選択していたのは、常に日本側だったのである。とはいえ、ヨーロッパ人もこの交流で様々な収穫を手に入れた。そもそも専門家の派遣や「珍品」の供給は、生糸や各種織物を中心に行われた交易の「潤滑油」に過ぎなかったが、日本人に西洋外科術や医薬品について教える立場の医師の一部は、日本の医薬品と治療法にも目を向けるようになった。やがて、いわゆる東洋医学に関する最初の情報は、中国からではなく、日本から西へと伝わったのである。お灸は Moxa（もぐさ）として各国語の語彙に定着し、中国の捻鍼法とともに日本人が開発した管鍼法と打鍼法が *acupuncture* として紹介された。「経絡」、「気」、「虚症」や「実症」などといった概念の理解は困難を極め、誤解もあって針術に対する評価は厳しいものがあつたが、灸術に関する事例報告と代替品の研究は半世紀以上にもわたって続いたのである¹⁵。また、アカネ科植物の

葉及び若枝から抽出された阿仙薬は *Terra Japonica*（日本の土）の名称で取引され、裕福な家庭で健康増進のため愛飲された玉茶は、一八世紀初頭まで「皇帝の茶」（*Keyzers Thee*）として重宝がられた¹⁶。

一六六九年及び一六七一年、幕府の依頼で長崎に赴いた薬剤師は、野外調査で確認できた植物のリストをバタフィアへ送った。香辛料などの植物で富を蓄積してきた会社の商人たちは、それを検討したが、最初苗の輸出許可は得られなかった。その後、上記の薬剤師の上司だった医師クライヤーが出島商館長として日本の植物調査を続け、薬草及び観賞用植物の報告、標本及び種をヨーロッパへ送り、西洋人による日本植物研究の基盤を築いた。クライヤーとともに来日した庭師マイスターは、一六九二年に発表した『東洋的・インド的園芸師』において一連の植物を紹介し、日本の庭園についても初めて詳細に紹介している¹⁷。

総まとめを試みるエンゲルベルト・ケンペル

南蛮人の追放後、日本に関する新たな情報は急激に乏しくなったので、一六六九年、オランダの作家モンタヌスは、商館長の江戸参府日誌の抜粋にイエズス会士による報告を織り交ぜて、「日本の皇帝への記念すべき使節団」という著書を発表している。モンタヌスはアジアにきたことはなかったが、資料を幅広く収集しながら、人類の歴史と文化における日本の位置づけに着目した点は、大いに注目に値する。オランダ語版に続きドイツ語版、英語版、フランス語版が出版され、ヨーロッパ中で日本に対する関心を高めることになる。と同時に、最新状況を現地で調査する必要があることが、知識人の間で改めて認識されるようになった。

その任務にあたったのは、ロシア、ペルシア、インドなど長年にわたる旅の末一六八九年バタフィアに辿り着いた医師ケンペルであった。クライヤーなどの地元の知日派から日本の植物、地理、歴史、社会に関する研究の重要性を指摘され、調査の依頼を受けたケンペルは、出島において若き秀才今村源右衛門英生や阿蘭陀通詞たちの献身的な協力の下で大量の資料を入手しその内容に関する説明を記録した⁽¹⁸⁾。項目ごとに日本を紹介するケンペルの『日本誌』（初版は一七二七年刊）はヨーロッパの日本観の基盤となり一世紀以上の間、来日する研究者の基本文献となった⁽¹⁹⁾。その附録には、すでに一七一二年に発表された、日本と外国との交流を採り上げた論文が含まれている。原則として人類の自由な交流を支持するケンペルは、日本を例外とし、歴史的、地理的、経済的及び社会的特徴を分析しながら、幕府の対外政策を妥当なものと評価している。將軍を頂点とする厳しい支配体制は無視していないが、魔女狩りの狂気と三〇年戦争後の混乱の中で育ったケンペルは、自由よりも安定と秩序を重視し、質素でありながら安心して暮らす日本人を讃えている。ケンペルはフロイスと同様に文化的差異を強く意識しているが、日本人は、ヨーロッパ人を手本にしないでよいという結論に至っている。この論文は一八世紀の知識人を大いに刺激し、カトリック教会からも啓蒙主義陣営からも激しく批判された。興味深いことに、ケンペルのこの論文は、日本にも一定の影響を与えた。一八世紀末頃『日本誌』の蘭語版を読んだ蘭学者志筑忠雄は、ロシアの南下を念頭にこの論文の和訳を試みた際、原文の長い題目を「鎖国論」としてまとめ、それまで存在しなかった「鎖国」という言葉を初めて日本語の中に採り入れた⁽²⁰⁾。

(1) 一五四九年十一月五日付、バードレ・メストレ・フランシスコ・ザ

ビエルが鹿児島よりゴアのサン・パウロのコレジオのイルマン等に贈りし書翰。村上直次郎訳「イエズス会士日本通信」雄松堂書店、昭和四三年、上巻。

(2) ヴォルフガング・ミヒェル「ヨーロッパから見た日本」九州大学公開講座委員会編『九州のなかの世界』九州大学出版会、一九九一年、二七―五四頁。

(3) Josef Franz Schütte S.J.: Kulturgegensätze Europa-Japan (1585). Tokyo, Sophia Universität, 1955 [Tratado em que se contem muito susinta e abreviadamente algumas contradições e diferenças de costumes entre a gente de Europa e esta provincia de Japão]。ルイス・フロイス著、岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』東京、岩波書店、一九九一年。

(4) Johannes Müller: Das Jesuitendrama im den Ländern deutscher Zunge vom Anfang (1555) bis zum Hochbarock (1665). Augsburg, Benno Filser, 1930.

(5) Wolfgang Michel: Von Leipzig nach Japan - der Chirurg und Handelsmann Caspar Schamberger (1623-1706). München, Iudicum, 1999, p. 44-56.

(6) 石ノ森章太郎著、高埜利彦原案執筆『鎖国―四つの口』中央公論社、一九九八年。

(7) ロナルド・トビ著、速水融・永積洋子・川勝平太訳『近世日本の国家形成と外交』創文社、一九九〇年。

(8) Reinier H. Hesselink: Prisoners from Nambu: reality and make-believe in seventeenth-century Japanese diplomacy. Honolulu, University of Hawai'i Press, 2002.

- (9) François Caron : Beschrijvinghe Van het Machtigh Coninckrijcke Japan. Amsterdam, Hartgers, 1648. フランソワ・カロンの著、幸田成友訳著『日本大王国志』平凡社、一九六七年。
- (10) 片桐一男『出島―異文化交流の舞台』集英社、二〇〇〇年。
- (11) ヴォルフガング・シヒェル「異文化との出会い―阿蘭陀カピタンの謁見について」『洋学史研究』第一五号、一九九八年、一―一頁。Wolfgang Michel : Prostratio und Pickelheringsreigen - Engelbert Kaempfers Erlebnisse im Schloss zu Edo und deren Hintergrund. In : Japanische Gesellschaft für Germanistik (ed.) : Dokumentation Asiatische Germanistentagung in Fukuoka 1999. Tokyo : Sanshusha, 2000, pp. 124-134.
- (12) Wolfgang Michel : Von Leipzig nach Japan - der Chirurg und Handelsmann Caspar Schanberger (1623-1706). München, Iudicium, 1999, p. 100-136.
- (13) 宗田一著『図説 日本医療文化史』思文閣出版、一九九三年、二二三―一四八頁。
- (14) Wolfgang Michel, Elke Weger-Klein : Drop by Drop - The Introduction of Western Distillation Techniques into Seventeenth-Century Japan 『日本医学雑誌』第五〇巻第四号(二〇〇四年)、四六二―四九二頁。シヒェル・ヴォルフガング「シーボルト記念館所蔵の「阿蘭陀草花鏡図」とその背景について」『鳴滝紀要』、第一七号、二〇〇七年、九―三八頁。
- (15) ヴォルフガング・シヒェル「ヨーロッパに Moxa (むぐさ) を紹介したバタフィアの牧師ヘルマン・ブシヨフの生涯と著作について」『日蘭学会会誌』第二三巻第一号(一九九八年)、四七―六三頁。
- (16) Wolfgang Michel : Far Eastern Medicine in Seventeenth and Early Eighteenth Century Germany. 『言語文化論究』第20号(二〇〇四年)、六七―八二頁。
- (17) Valentini, M. B. : Museum Museum oder vollständige Schau-Bühne aller Materialien und Specereyen. Vol. 1, Frankfurt 1704, pp. 208-211.
- (18) George Meister : Der Orientalisch-Indianische Kunst- und Lust-Gärtner. Dresden, Johann Riedel, 1692.
- (19) Engelbert Kaempfer : Heutiges Japan. Herausgegeben von Wolfgang Michel und Barend J. Terviel. Iudicium Verlag, München, 2001, Vol. 2, pp. 73-179.
- (20) Peter Kapitza : Engelbert Kaempfer und die europäische Aufklärung : dem Andenken des Lengoer Reisenden aus Anlass seines 350. Geburtstags am 16. September 2001. München, Iudicium, 2001.
- (21) 大島明秀「近世後期日本における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容」『洋学』第一四号、一―三二頁。